

# ジェレミー・ベンサムにおける富裕・人口・救貧 (1)

深 貝 保 則

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 18世紀における富裕・人口把握の諸類型
  - (1) 概要
  - (2) 文明史論：古代・近代論争から4段階論へ
  - (3) 人口の増減傾向問題と政治算術
  - (4) 自然法則としての人口原理
  - (5) 政治算術からの変形、家計の調査、貧困の実態、そして最低賃金裁定法案
- 3 スターク版『ジェレミー・ベンサム経済学著作集』以降のベンサム経済論
  - (1) ベンサム経済論をめぐる緩やかな波状的展開  
[補1] ベンサムの経済学関連著作、著述をめぐる資料的なベースの段階的展開、  
および、ベンサム・マニュスクリプト Box 17 へのアクセス顛末
  - (2) スターク版『経済学著作集』から新『著作集』版『経済学著作第1巻』の登場へ
  - (3) 「経済学便覧」：スターク版と新『著作集』版

文献一覧

(以下、続く)

- 4 「商業の体系」の起動力と農業と製造業との間のバランス——おもに『高利の擁護』第2版への後書きをめぐる——
- 5 「経済学便覧」および「負担なき供給」
- 6 1797年前後の救貧問題
- 7 「真の警鐘」および「経済学概論」
- 8 むすび

## 1 はじめに

ある社会において人びとは貧富いずれの状態にあるのか、またそれは、人口とどのように関わっているのか、——この素朴な事柄はしかし、さまざまな観点から論じられうる。そしてその診断は、社会をどの方向に導くべきかをめぐって、構想もしくはスタンスの違いにも繋がる。近代の西欧においてこれらの問題は、何通りも

の位相において問われた。たとえば、一国の人口は増減いずれの傾向にあるのかという点に関心が寄せられ、その増減をめぐる解釈はしばしば激しい論争を呼び起こした。なにしろ租税を集める制度は整っているのに人口を統計的に捉える仕組みはできていないという状況のもと、どのように人口を数として把握するのかということ自体、厄介な事柄であったのだから。また、人びとの気質、動機や意欲のあり方が国民的な

富裕の度合いに影響するものとみなされ、貧困とりわけ極貧の人びとをどのように社会が処遇すべきかが問われた。ひとたび所有や救済などなんらかの社会的な枠組みを制定したり手直ししたりすると、その変更に従って人びとの振る舞い方も変わりうるのだから、意欲や気質をめぐる診断と制度設計の構想とをめぐる議論の様相は複雑であった。さらに、現下の文明を歴史的な段階性のもとに位置づけ、現況をポジ、ネガいずれのベクトルで捉えるのかということをめぐる対立的な診断があり、それぞれの思考のもとに、富裕や人口、そして人びとの精神的態度が照らし出された。これら問題圏にとっての物質的な基底に関わっていえば、人は食糧なしには生きることができず、次の世代へと「生きる」領分を引き継いでいくこともできないのだから、人口と食糧とのバランス、および人間の欲望を満たすべき諸活動のうちで食糧生産の領域と他の財貨の生産の領域とのあいだの関わりについても焦点が当てられることとなった。これは農民と職人、あるいは農村と都市とをめぐる、物的な循環のみならず社会構造としての関わりを問うことにも連なりうるものであった。総じてこれら諸点などをめぐってさまざまな言説が飛び交うなかで、やがて経済を固有に論じる思考枠組みが徐々に成立していくこととなった。

小論は、近代的な社会の到来のもとで活発にして多様に展開されたこのような問題圏をめぐるジェレミー・ベンサムが論じた経済論の特徴を、とりわけ18世紀を通じて先行する諸議論とのコントラストにおいて捉えるものである。<sup>1)</sup> この場合に、ベンサムの関連著作もしくは著述の時期の段階性に注意を払いつつ整理する。<sup>2)</sup> まず、18世紀のイングランド、スコットランド、そして部分的にはフランスにおける人口と富裕、貧困をめぐる特徴的な諸論調を概観する(第2節)。つぎに、20世紀半ばのウェルナー・スターク編『ジェレミー・ベンサム経済学著作集』(EW: 1952-1954, 3 vols.)以降におけるベンサムの経済論をめぐる検討を簡単に見たうえで、急速に進

みつつあるベンサムの資料へのアクセスの新段階を見ておく(第3節)。第4節以下では、1780年代半ば以降1800年代前半に至る当のベンサムの論調の変化を4段階に分けて整理し(第4～第7節)、18世紀の諸論調との関わりでベンサムの議論の特徴を確認する(第8節)。17世紀から18世紀にかけての西欧の知の系譜が18世紀終盤の新たな課題に直面したなかで、スミスに典型的に登場した経済学の思考が新たな揺らぎを見せることとなる。やがてはリカードとマルサスに見られるように経済学の模様替えも

1) 2014年8月に、国際功利主義学会(ISUS: International Society for Utilitarian Studies)の第13回大会を、横浜国立大学および横浜開港記念会館を会場として主催した。主催責任者(ISUSの学会のthe President Elect)は深貝保則、実施責任者は有江大介で、何名かの中堅、若手研究者の強力なサポートのもとで、国外、国内それぞれから50名程度ずつ、計100名強の報告者を得ることができた。このような学会を開催できたのも、20年遡って1994年8月に、永井義雄教授(当時・一橋大学)を主催者、音無通宏教授(当時・中央大学)を会場責任者として、有江、深貝の両名がその開催準備に加わるという経験があったのことであった。1997年ごろから、これらのメンバーはFred Rosen, Philip Schofieldを中心とするユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのベンサム・プロジェクトをはじめとするUK側のメンバーとのあいだで、ベンサムを軸のひとつとしつつ功利主義の共同研究に着手した。小論の初発は、1998年9月にロンドンで行なったthe second Anglo-Japanese Joint research meeting on Utilitarianism (Bentham House, University College London)の際に、Jeremy Bentham on Wealth and Populationという設定で試みられたものである。当時の、「功利主義の歴史的意義と現実的課題の研究」(1995-1997年度基盤研究A: 研究代表者・永井義雄)、「社会正義と功利主義の実践可能性」(1998-2000年度基盤研究A: 研究代表者・音無通宏)、「功利主義の多元的挑戦: 経済・政治・法律・倫理から」(1999-2001年度基盤研究A: 研究代表者・有江大介)による科学研究費の各プロジェクトは、20年間のインターバルでもって功利主義の国際会議をこの国で開催できるほどの研究の拡がりを形作る上でも、貴重なものであった。なお、小論は直接には、科学研究費・基盤研究B「幸福、存続、ウェル・ビーイングの思想基盤: 功利主義の射程と得失をめぐる国際的研究」(2015年度より継続中: 研究代表者・深貝保則)による研究成果の一部である。

たしかに重要であり古典派経済学をめぐる検討はかねてよりこの点に大きなウエイトを置いてきた。しかし小論ではむしろ、統治と立法に関心の軸を置くジェレミー・ベンサムが18世紀最終盤から19世紀にまたがる十数年において富裕-人口-救貧の問題圏に向き合う、そのありようを照らし出すことにしたい。

このようなテーマの場合、18世紀を中心とする広範な思想文献とともに、当のジェレミー・ベンサムについてスターク版『経済学著作集』以降における資料的な状況の大幅な改善を踏まえることが必要である。そのなかでも、1960年代から進行中の新版『ジェレミー・ベンサム著作集』(CW)の一環として『経済学著作』の第1巻(WPE-I)がマイケル・クイン Michael Quinn の編纂により昨2016年夏に刊行されたことが貴重である。そこでこれら文献的な事情の改善を踏まえ、今後の検討に向けての手掛かりを組み立てることが小論のさしあたりの目標ではある。

なお、ベンサムの救貧論をテーマの一部に掲げているとはいえ、この側面については暫定的な検討にとどまる。ベンサムは、統治の枠組みを支える法的な根拠の観点から経済の枠組みを

2) ここで関連著作ばかりでなく著述と記すのは、膨大な原稿を書き続けつつも、その多くは形を整えて刊行するには至らなかったという当のベンサムの執筆経緯に関わっている。このような草稿群の存在を考慮して検討しうるのも、20世紀半ばのウェルナー・スタークによる『ジェレミー・ベンサム経済学著作集』(EW)に続いて、1960年代後半以来の新たな『ジェレミー・ベンサム著作集』(CW)および『ジェレミー・ベンサム書簡集』(COR)の継続的な刊行、そして草稿解説の新たなプロジェクトの展開といった、資料的な状況の進展に支えられてのことである。ベンサムの草稿の発掘をめぐる最近の編纂事情について、その概要を小論第3節に示す。小論である程度の頻度で扱うベンサムの著作については、文献一覧の冒頭に示すように略号によって示す。最新のものを除きおおむね、『ジェレミー・ベンサムの挑戦』の凡例(深貝、戒能編, 2015, vi-viii ページ)を踏まえる。この凡例におけるベンサムの著作群のタイトルの日本語表記や略語については戒能通弘氏が調整の役に当たってくださった。

位置づけている。その具体化として、国民的富裕の水準とそれを支える人口の大きさ、およびその人口を構成する人々の態度や力量のバラつきなどについてベンサムがどのように捉えたのかという点に注目しながら、富裕と人口の関わりや人々の態度・資質を問い直すに当たっての救貧問題への処方をいかに描いたのかに焦点を絞って検討を施すこととなる。

## 2 18世紀における富裕-人口把握の諸類型

### (1) 概要

18世紀初頭以来のフランス、スコットランド、イングランドの文芸やとりわけ統治をめぐる諸言説は、小論冒頭に掲げたような諸問題をめぐって波状的に論じ、やがて、多義的な「エコノミー」の用語を活用して「エコノミー・ポリティーク」もしくは「ポリティカル・エコノミー」の領域として把握するに至る。17世紀なかばからのいくつかの議論を起点として富裕-貧困、人口、および文明をめぐる新たな議論を生み出していったのである。とくに顕著なのは、文明史論、政治算術、自然法則という3通りの類型が18世紀を通じて波状的に展開したことであった。別の機会に行なった俯瞰(深貝2009)をベースとして先取りのいえば、18世紀後半における富裕と人口とをめぐる議論は図1のように要約的に示すことができよう。<sup>3)</sup> そのうち第1番目の文明史論には、17世紀終盤からの古代-近代優劣比較論から18世紀スコットランド啓蒙の4段階論へと、移ろいがみられる。むしろこの経緯のなかで、ある1人の思想家のうちに複数のスタイルが入り混じるようなこともあった。ちなみに1780年代になると後半になると、上記の3通りに加えて新たなスタイルが登場しはじめる。家計調査も含めた手法を用いることによって下層の境遇を捉えようというもので、やがてベンサムもこの方向を踏まえることとなる。

図1 人口問題：18世紀中葉以降における特徴的な論調

- 文明史論：古代-近代比較からスコットランド啓蒙の4段階論へ
  - 古代-近代比較の人口論争 (David Hume 1752; Robert Wallace, 1753, et al)
  - 人口減少=第4段階における (Lord Kames, 1758, 1774)
  - 腐敗 (Adam Ferguson, 1767)
  - 発展的社會のもとでの富裕の増進 (Adam Smith, 1776)
  - 奢侈に起因する対極としての貧窮 (John M'Farlan, 1782)
- 政治算術：名譽革命以降の人口の動向
  - 人口減少 (Richard Price, 1769, 1771, 1779)
  - 人口増加 (Arthur Young, 1774; John Howlett, 1781)
- 自然法則、および救貧法への批判
  - (部分的には4段階論と接合)
  - Joseph Townsend (1786)
  - Thomas Robert Malthus (1798)
- 人口、とくに貧困をめぐる実態的な把握の試み
  - 下層の生活境遇への着目 (Thomas Ruggles, 1793-1794; David Davies, 1795)
  - 下層の境遇、救貧法の歴史的展望、そして人口把握の試み (Frederick Morton Eden, 1797, 1801)

## (2) 文明史論：

### 古代-近代論争から4段階論へ

富裕や人口をめぐる問題は、ときに文明史的な広がりのもとで語られた。この場合、いわゆる古代-近代論争からスコットランド啓蒙に特徴的な4段階論へと、議論のスタイルの移行がみられる。まず、古代の文芸と近代のそれとのあいだでいずれが優れていたのかを論じる17世紀終盤フランスの論調は、ジョナサン・スウィフトの『書物合戦』(1704)などによって18世紀初頭の英語圏においても展開を見た。この古代、近代のあいだの文芸をめぐる優劣比較という設定はモンテスキューの『ペルシア人の手紙』(1721)のなかに収められたある書簡において、古代と近代とのあいだの人口の多寡をめぐる比較へと変形された。そして1740～1750年代のスコットランドに至って、社会構造の理解という論点を伴う形で古代と近代とのあいだでの人口の多寡を問う論争へと展開した。<sup>4)</sup>まずロバート・ウォーレスは1740年代半ばにエディンバラ

の哲学協会において、古代に比して近代では人口が減少したのだが、それは流行病など自然的な要因よりも「道徳的」な要因に起因している、という。たとえば、古代の奴隷所有者は次世代の奴隷をも確保することを考慮するので人口は一定水準以上になる誘因が働くのに対して、近代では貧民はこのような庇護を得ることができず、家族をなすこともできない。また、中世以来のカトリックの教義は修道院に典型的なように独身を高潔だとみなし、イスラムの教えは一夫多妻制を認めたので、いずれも人口に抑圧的に働いた、などなど、と (cf. Amoh, 2005)。

これに対して、すでに『道徳政治論集』(1741)を刊行していたデイヴィッド・ヒュームはその改訂版の『政治論集』(Hume, 1752)に論説「古代の国々における人口の稠密さ」(of the populousness of ancient nations)を書き加えて、近代のほうが人口についても優れているとする。——農業は農業に従事する人々を扶養しうる水準を上回る食糧を生み出しうるのだが、古代に

はこの剰余が軍事を支えることなどに費やされていた、これに対して近代には、製造業に従事する人々の食糧となることを通じて、豊かさにも連なるという。この点にも、ヒュームは近代のポジティブな特質を見出したのであった。

ヒュームの議論を受けてウォーレスは『古代と近代における人口』(Wallace, 1753)において、のちのマルサス『人口論』初版の冒頭数章とも似通った数理的モデルを示す。1組のカップルから男女半々で都合6人の子供が生まれて4人が成人し、以降33<sup>1/3</sup>年を一世代として繰り返すと、30世代目の1,000年後には32億人に達する、など。——現実にはそれほど多くの人口は存在しないが、これは人口増加傾向を妨げる要因のためだという。とくに、奢侈と墮落とが結びついた生活様式のもとでは結婚や家族の養

育が疎かになって人口が減少するとのある種の文明批判、および農業から商工業への人口のシフトに伴って耕作の行き届かない土地が増えると人口が制約される、との社会構造把握が示された。

このように古代と近代との優劣を比較する議論は、文明の比較から人口の多寡への比較へ、そしてまた経済的社会構成の構造をめぐる比較へと推移したのであるが、この経緯と並んで、文明の進展を歴史的段階的に捉える議論が登場した。その嚆矢をなしたのは、のちにケイムズ卿となるヘンリー・ヒューム Henry Home が匿名で刊行した『ブリテンの古事』付論であった(Home = [Kames], 1747, p.196)。狩猟、牧畜、農耕、そして農業と製造業を商業が取り持つ段階へ、という段階論的思考は、ケイムズ卿の『法

3) ただし、ここで《図1》および本節(2)以下の項目だては深貝(2009)での組み立てとは多少の配列替えを行なっている。「人口動態と富裕-貧困認識をめぐる文明史論と政治算術」を扱う深貝(2009)では18世紀の議論の展開の段階性を軸に据えたのに対して、ここではベンサムに先行する議論のパターンを典型的に示すことに目的をおいているためである。この配列替えに当たっては、2013年3月に渡会勝義教授(当時、早稲田大学)によって招かれたイヴ・シャルビが行なった Population, Economic Growth and Religion という設定での報告に対して予定討論を担当したことがきっかけとなっている(Fukagai, 2013)。

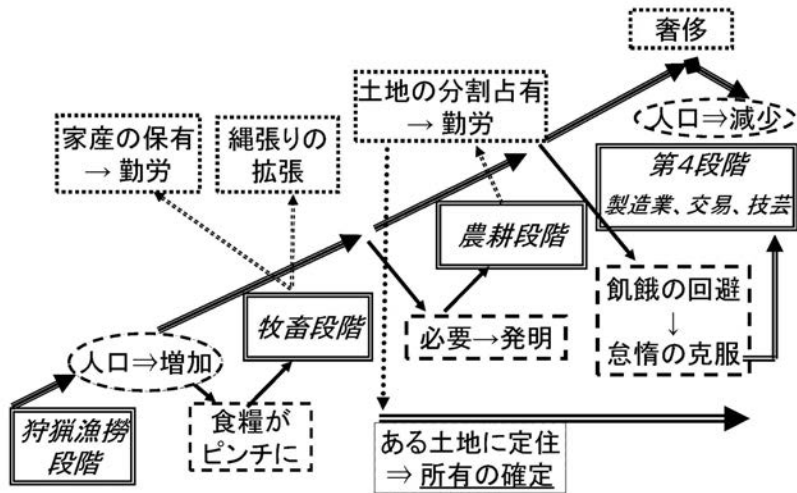
なお、《図1》をめぐるいまひとつ、これは私自身にとってのことであるが1990年代終盤、ベンサムおよびそれに先行する時期の富裕と人口とをめぐる議論の状況を探るというテーマに着手したところに、問題の配置をいわば鳥瞰的に見通すという意味で小林昇『経済学の形成時代』(小林, 1961)のいくつかの章が大いに手掛かりとなった。それというのも、——当時勤務していた東京都立大学経済学部から公立大学在外研究員制度(短期)により2ヶ月間ほどの日程で渡英する機会を得た1998年秋に、ベンサムを取りまく文献群を British Library の rare books room で次々と取り出すことを試みたことがある。その際、たとえば *Society and Pauperism: English Ideas on Poor Relief, 1794-1834* と題する J.R. ポインターの書物(Poynter, 1969)では情報が仔細に過ぎて、諸論調を俯瞰的に見渡すには却って戸惑いを感じたものである。そこでにわかに、人に頼んで小林『形成時代』の

抜き書きを急ぎ作って送ってもらったところ、これは大いに役に立った。

そのようなわけで、深貝(2009)やそれをベースにして寄稿した『マルサス人口論事典』の担当項目(深貝, 2016)においても小林(1961)を参照しておいた。しかし迂闊なことに長らく、羽鳥卓也『市民革命思想の展開——古典経済学成立史序説——』(羽鳥, 1957)に書き下ろしとして所収の第4章「重商主義の解体(二)——18世紀中葉以降における人口(=綜割)論争の意義——」の存在を見落としていた。羽鳥のウォーレスやヤングなどをめぐる解釈には藤田五郎の豪農論と通じるような独特な響きが漂うのだが、ウォーレス、ヒューム、プライス、ヤングと並べて「人口論争とスミス」へと連ねるその議論のはこびは、できることならば私は、このテーマに着手した早い時期にあって手掛かりのひとつとしておくべきものであった。小林『形成時代』はもともと1960年から1961年にかけて進められた『経済セミナー』誌上の連載であるが、日本語の関連研究文献を丁寧に紹介しているものの、不思議と羽鳥の上記のモノグラフへの言及がない。『マルサス人口論事典』に所収の深貝(2016)では、むしろ羽鳥のこの文献の存在に気付いていたのではあるが紹介しそこなったので、ここに補っておく次第である。

4) ヒューム、ウォーレス間の論争をめぐることは国内でも、永井義雄(1962)、田中敏弘(1971)、坂本達哉(1995)、などの蓄積がある。ウォーレスに焦点を当てた最近のアプローチとして、中野力(2016)。

図2 ケイムズ『人類史の描写』(1774):4段階論



についての歴史的考察』(1758年)の第1論稿「刑法について」および第3論稿「所有権の歴史」においてひとまずその形を整えることとなった(Kames, 1758, pp.77-79n., pp.140, 144-149). ここでは便宜上、ケイムズがのちに『人類史の描写』において示した議論に沿って、その概要を図2に示す。ここでは、狩猟から始まる4段階のうち、定住が伴う第3の農耕段階において所有が本格化すること、農業と製造業とを合わせもつ第4段階では奢侈の波及によって人びとの気質が変化し、それまでの食糧増産に支えられての人口増加の傾向とは異なって人口減少の傾向が現われることなど、ケイムズに特徴的な見方が示されている。<sup>5)</sup>

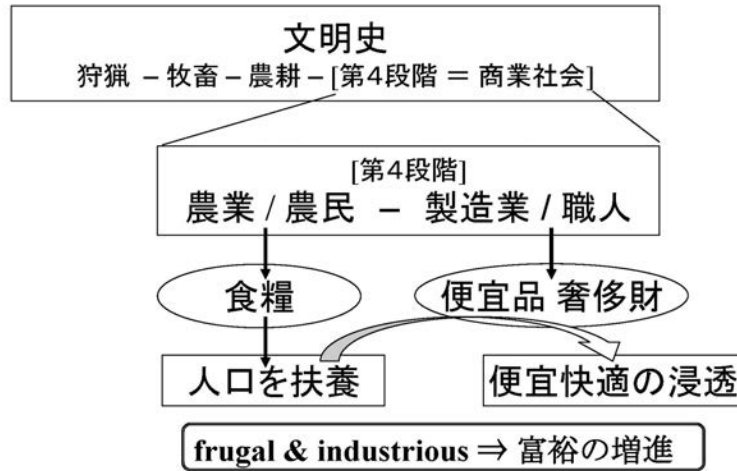
この4段階論は、かつてロイ・パスカル(Pascal, 1938)が「スコットランド歴史学派」として取り上げて以来、しばしば注目されているものであるが、富裕や人口をめぐる18世紀の諸論者がどのように診断していたのか、という事柄

を見渡すうえでも手掛かりになる。ケイムズが『人類史の描写』に先立って『法についての歴史的考察』のなかの2つの論説で示した段階論的歴史把握は、ほどなくスコットランドの知識人たちのあいだで知られるものになったようで、たとえばアダム・ファーガスンは『市民社会史』(Ferguson, 1767)において、厳密な4段階ではないながら野蛮(狩猟漁撈)から農耕へ、そして商業へという形での段階論的な思考を提示した。ファーガスンに特徴的なのは、その第6篇で「腐敗と政治的隷属(of corruption and political slavery)」を掲げ、進展の行きつく先に道徳的腐敗、政治的退廃の危険を見据えたことである。

スコットランドの貴族の家系であり、ジャコバイトの乱に加担を試みたとかどで大陸での亡命生活を余儀なくされたジェームズ・ステュアートは、やがて『経済学原理』(Steuart, 1767)を著わした。その第1篇においてステュアートは、人口と農業との関わりを考察の起点に据え、人口増加の2大原理として「生殖は存在を与え、食物はそれを維持する」という。古代の人口推計を介して近代(当時の現代)を照らし出すというウォーレスとヒュームとのあいだの論争とは異なって、ここでのステュアートの主眼は、

5) 定住に向けた社会的制度変化が所有の法規範の確定に向かうことを軸としたケイムズの段階論的思考をめぐる、Lieberman (1983)、田中秀夫 (1987)。

図3 文明史と人口動態 (1) (ヒューム)、スミス型



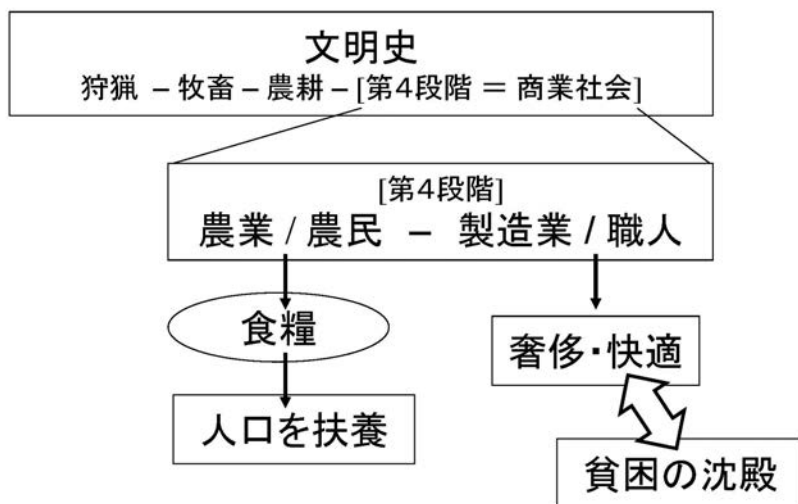
歴史通底的な原理を示して社会の動態に貫く構造を描き出すことに置かれていた。<sup>6)</sup>

ファergusンやステュアートの書物の刊行に先立ってアダム・スミスは、1760年代初頭にグラスゴー大学で行なった法学の講義のなかで、狩猟-牧畜-農耕-第4段階という把握を用いて法と規範の歴史的進展を描きだした。この講

義ののち、ほどなくスミスはグラスゴー大学の教授職を退任するのだが、やがて書かれた『国富論』ではいくつかの異なるパターンの歴史ヴィジョンが登場する。その第1篇の価値についての考察においては未開と文明とのコントラストがなされ、分配をめぐるのは発展的、静止的、衰退的という3種類の社会状態の対比が示される。「序説」に示されたような、人びとが「節儉にして勤勉 (frugal and industrious) であるならば」富裕の増進の効果が社会の最下層にまでいきわたるとの見通しは、このうちの発展的社会のヴィジョンと結びついている。第3篇では中世以来のヨーロッパの具体的な進展を念頭に、第2編末尾に掲げる「資本投下の自然的順序」が現実には歪められて進展したと論じるのだが、第5篇冒頭に至ると明示的に4段階論が活用される。とはいえ、ここでのスミスによる4段階論の活用の仕方は独特である。つまり、社会構造の段階的な進展に伴い第4段階に至って、防衛を公共的に用意する本格的な必要が生じることとなったとの次第が示された。——狩猟段階ではその営み自体が戦に転用可能であり、牧畜段階における遊牧は隊列をなした行軍に連なり、農耕段階の耕作は塹壕掘りなどに必要な体力を

6) ステュアートについてはこの半世紀ばかり、スミス『国富論』に先立ち、そしてスミスと同様に近代的な市場の特質を、重商主義の観点から捉えた経済学体系であるとの関心で掘り起こされている。二つの「経済学体系」というその関心の代表的なものとして、小林 (1973)。たしかに、重商主義でありながら市場の機構を包括的に捉えたものとしてステュアートを理解するというアプローチには一理ある。しかしステュアートの体系は、統治の学としての特質がきわめて色濃く、この意味では古典古代以来のオイコノミアの認識の近代的な現われとして捉えておくことが必要となろう (深貝, 2013, 86-87 ページ; オイコノミアの問題圏の近代のエコノミー論への連なりをめぐって, 深貝, 2015 をも参照)。ステュアートの『経済学原理』体系における、第1篇の第2篇に比しての歴史貫通的な意義、つまり自然のなかでの人間的経済的活動領域の織りなす物質代謝をめぐる理解については、かなり前のものであるが、田添 (1957) への参看を求めておきたい。

図4 文明史と人口動態 (2) マクファーラン型



養いうるのに対して、商業社会にあっては戦闘に必要な力量は日常的な経済行為とは程遠く、そこで特定の人びとに託すしかなくなってしまう、というわけである。第4段階の社会構造の捉え方はケイムズとスミスとの間で異なっており、実のところは以下に触れるマクファーランや、タウンゼンドおよびマルサスはさらに異なっているので、いささか便宜的ながら、これらを図示することにしよう。まず、ケイムズについての図2との対比でスミスのいう第4段階について、図3に示す。なお、4段階論の形をとらないとはいえ、農業と製造業とを商業が取り持つ近代の社会についての捉え方の点で、ヒュームの議論はスミスのそれと同様である。

スミスは、その『国富論』冒頭の「序言」などに典型的に見られるように、発展的社會のもとで富裕の恩恵が社會の最下層にまでいきわたるとの見通しを示した。これに対して、その恩恵が人びとのあいだに広くいきわたるのではなく、むしろ恩恵は偏った範囲にしか及ばないという認識が、スコットランドにあってほどなく浮上した。それはエディンバラの、スミスもゆかりのキャンONGゲートの、その教会に関わっていたジョン・マクファーランによってである。<sup>7)</sup>

『貧民についての考察』(1782年)においてマクファーランは4段階論を用いつつ、スミスの議論とは対照的に「貧困者の大多数は遅れた国、あるいは野蛮な国においてではなく、もっとも肥沃でもっとも文明化した国において見出される」という(M'Farlan, 1782, p.10)。第2の牧畜段階において支配従属関係が生じ、第3の農耕段階で土地財産の集中が拡大して貧富の格差が増幅する。そして第4段階に至って、奢侈の蔓延の対極に一層の貧困の累積が生じる、というのである。多少の立ち入った検討は別稿で行

7) マクファーランについては管見の限りほとんど検討されたことがないようで、来歴も定かではない。わずかながらのアプローチを深貝(2009)のなかで試みたものの、あくまでも試行的である。1778年6月5日にマクファーランが行なった説教はほどなく公刊されたが(M'Farlan, 1778)、その表紙には、One of the ministers of Canongate, Edinburgh と記載されていることなどから、聖職者であったといった程度のことは判る。目下のところ、UKおよびアイルランドの研究図書館横断検索データ・ベースのCOPAC <http://copac.jisc.ac.uk/> や ECCO (Eighteenth Century Collection Online) 所収の電子テキストなどを手掛かりとしているだけであって、エディンバラでの調査などを試みてはいない。



なったので（深貝，2009，11-13 ページ），ここではスミスについての図3との対比で図4を示しておく。

スコットランド啓蒙のなかで育まれた4段階論は，ほどなくフランスではテュルゴが取り入れることとなり，イングランドでもジョゼフ・タウンゼンドの1786年の救貧法批判の論稿において活用された。このタウンゼンドについては人口をめぐる自然法則論として，項目(4)で扱う。

### (3) 人口の増減傾向問題と政治算術

近代初頭のヨーロッパではウィリアム・ペティの政治算術にさきだって，統計的な手法で人口の動向を検討する議論が展開した。とはいえ人口についての統計調査は行なわれることのなかった当時のことだから，この検討のための統計データは『旧約聖書』の記述のなかに求められた。それは，「創世記」中にアダム以来，あるいはエイブラハム以降の系譜の説明に描かれるような，それぞれの人物が何歳の折に子を得て何歳になって没した，といった記載を手掛かりに，世代交代の間隔や寿命を割り出す，というものであった。もっとも，『旧約聖書』における人物たちはしばしばずいぶん長命であって，これに対して人口を論じる近代初頭の議論のなかでは，現実的な世代交代の年数を想定するようにと設定条件の，置き換えがなされる。いまここで森田優三『人口増加の分析』（1944年）における検討を参考にすると，たとえばバリの神学者ディオニウス・ペタヴィウスは『年代論』（1627年）のなかで，ノアの洪水以降に一組の夫婦から23年間隔を目安に8人ずつの次の世代が育つモデルを示し，人口の増加傾向を描いた。これは単に数値上の計算に留まっていたが，その後，半世紀のうちには実証的な議論が展開することとなる。ジョン・グラントは『死亡表に関する自然のおよび政治的諸観察』（1662年）のなかでロンドンと地方とにおける洗礼や埋葬の記録を検討して，幼児期の死亡率が高く，また人口はロンドンへ流入する傾向にあることなどを示した。ロンドンの法曹界の重鎮マッシュュー・

ヘイルはグラントの議論を参考にして，『人類の始原について』（1677年）のなかでペタヴィウスの計算に改善を加え，人口は「幾何的な割合」で増加する傾向にあると論じた。<sup>8)</sup>

このような，『旧約聖書』の「創世記」中の記載をデータとして扱い，あるいはロンドンにおける人口の動きを間接的なデータを手掛かりに推し量る議論が，すでに17世紀半ばにはある程度育まれていた。そして，設立されたばかりのロイヤル・ソサイエティの会員ともなったウィリアム・ペティは，『租税貢納論』（1662年）やおそらくは1672年時点に書かれた『アイルランドの政治的解剖』（1691年刊）など以来，入手可能なデータを駆使し帰納的な手続きで「政治体」の状況を診断するという手法を用いた。定量的にアクセスできるさまざまなデータを手掛かりに社会の状況を推し量るという意味で，ペティは近代的な社会統計学の先駆者となるのだが，18世紀にかけてこのスタイルの議論は，1690年に刊行されたペティの著作の題名（*Political Arithmetick*）に因んで「政治算術」と呼ばれることとなった。

18世紀半ばの政策論争の焦点のひとつに，公債依存型の財政構造のもとで未亡人や高齢者のための年金をいかに設計するのかという課題があった。スコットランドでは1748年に，当時の教会や大学の要職者たちの未亡人や子供の養育用に基金を設立するための試算表が出版され（[Webster], 1748），そしてこのパンフレットの著者と目されるエディンバラの聖職者アレクサンダー・ウェブスターは1755年に，教会のネットワークを活かしてスコットランドの人口調査を試みた。<sup>9)</sup>

実際のところ，年金の制度的な設計のためには平均寿命ないしは平均余命が不可欠の情報である。だが当時，人口調査はこのケースを除い

8) 森田(1944)に詳しい。東京商科大学を卒業後，創設期の横浜高等商業において統計学を担当した森田優三はその初期の仕事として，このテーマを掘り下げた。

ては行なわれておらず、そこで平均寿命を割り出すために政治算術が活用された。そして、名誉革命後の1世紀弱のあいだの人口の趨勢は増減いずれであるのかをめぐって論争が燃え上がることとなった。1740年代からの人口の多寡もしくは増減傾向をめぐる論争は、古代・近代の優劣を問うウォーレスとヒュームの論争、年金設立をめぐる試算のいずれも、まずはスコットランドの側で行なわれた。しかし、ケイムズを起点として1760年代からのスコットランドでの議論が主として4段階論の形をとったのに対して、政治算術の形をとった議論の中心はイングランドに移ることとなる。

ウェールズ出身でのちにアメリカ独立を支持した非国教の牧師リチャード・プライスは、1769年に洗礼や埋葬のデータをもとに主にロンドンの人口を推定して平均余命を割り出し(Price, 1769)、続いて生残支払い(reversionary payments)に関する書物において、未亡人や高齢者への年金計画、および生命保険の価値の計算方法などを検討した(Price, 1771)。そして1779年には家屋および窓への課税データに依拠しつつ、窓税が増加しているという指標について、零細な家族の家族数が減少して小規模の家屋が減少し、多くの窓を持つ邸宅を建てる余地が生じた、という推論を行なった(Price, 1779)。こうしてプライスは、イングランドおよびウェー

9) 1748年の試算のパンフレットは匿名であるが、ウェブスターによってなされたと考えられている。この試算は、スコットランドの教会の聖職者や、セント・アンドリュース、グラスゴー、エディンバラ各大学の要職者たちの未亡人および遺子たちの養育のために年金を設立するとの、1743年に議会に提案された法案を受けて行なわれたものである。この法案の文面は、文献一覧に挙げる[Great Britain] (1744)が伝えている(この資料は、National Library of Scotland 所蔵資料により ECCO に収録されている)。また、試算に続いてウェブスターが1755年に行なったとされる人口調査の中心については、20世紀半ばにジェームズ・グレイ・キッドの手によって提供されており(Kyd, 1952)、永井(2003)がウォーレスやマルサスへと連なる形である程度の検討を行なっている。

ルズ全体の人口は名誉革命以降4分の1減少しており、人口の実数は500万弱だと割り出した(深貝, 2009, 10ページ)。

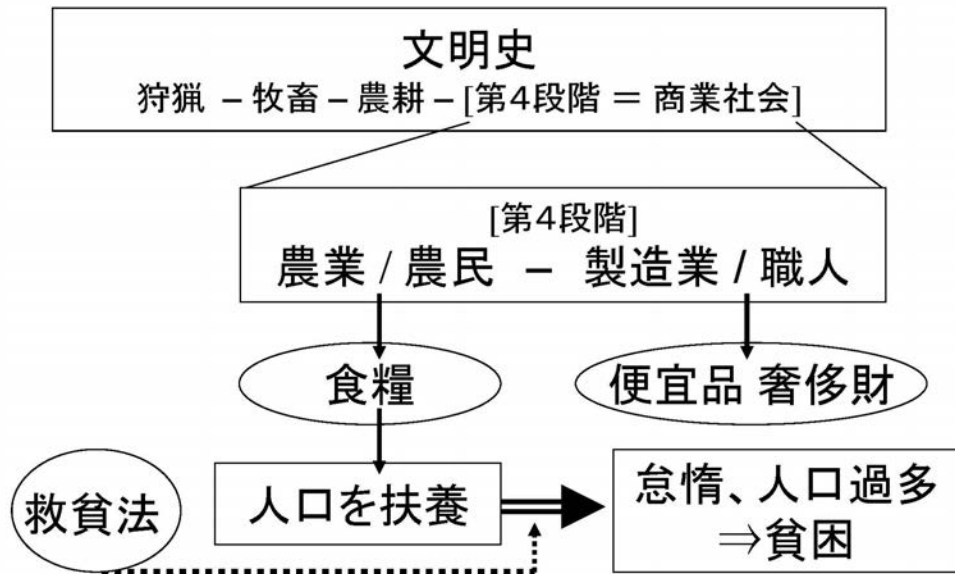
プライスの人口減少論に対してはアーサー・ヤングが『政治算術』(Young, 1774)において、奢侈生産を含む製造業側からの食糧需要は農産物生産を刺激することを介して人口増加をもたらすと論じ、1779年にはウィリアム・イーデン(オークランド男爵)やウィリアム・ウェールズらも人口増加論を主張した。なかでも重要なのがジョン・ハウレットの『イングランドおよびウェールズの人口に関するプライス博士の論説についての検討』(Howlett, 1781)である。洗礼や埋葬許可証、窓税などのデータを活用し、たとえば、窓の多い家屋の数の増大は一戸当たりの居住者が増えたことを示唆すると推論して、人口は増加傾向にあると論じた。ハウレットの推計では、当時の人口の実数は900万弱とされた(深貝, 2009, 10-11ページ)。

#### (4) 自然法則としての人口原理

イングランド南部の教区牧師ジョゼフ・タウンゼントは『専制のおよび自由な統治』(1781)のなかで、生産・商業活動が活発で自由な社会においてこそ人口が豊富になることができると論じた。タウンゼントは『救貧法に関する考察』(Townsend, 1786)第8節において、大西洋上の孤島に山羊とグレイハウンド犬とが順次持ち込まれるという設定で、牧草、山羊、犬の3者間の相互制約的なバランスがやがて生じるとの例証のもと、食糧と人口とのあいだの「自然的均衡」を論じた。また、貧困や飢餓が自然法則からの当然の帰結であることを強調するマルサスとは異なり、タウンゼントの場合、食糧制約と努力のあいだを揺らぐうちに自ずと均衡点にたどり着くことを示すものであった。なお、タウンゼ

10) 深貝 2009, 13-15 ページ。タウンゼントについては、柳沢(2003)がある。それに先立ってマンチェスターで開かれた2001年の経済思想史学会(UK)の折に、タウンゼントとベンサムとの対比を行なった(Fukagai, 2001)。

図5 文明史と人口動態 (3) タウンゼンド、マルサス型



ンドは例証を承けて「人間の数を規制するのは食糧の量である」という命題を引き出し、さらに4段階論を活用して文明的な比較を行なうのだが、この議論はその救貧法批判を支える。「希望と恐怖とはインダストリーへのバネ」であるが、救貧法はこれを著しく損なう、と。<sup>10)</sup>

#### (5) 政治算術からの変形、家計の調査、貧困の実態、そして最低賃金裁定法案

1770年代から1780年代前半にかけて、とりわけプライスとヤングやハウレットのあいだで人口増減傾向をめぐる活用された政治算術であったが、1780年代後半になると数量的、統計的に社会的実態を把握しようとの手法はいくつかの変化を見せる。

まず、1787年までのハウレットは名誉革命以降の人口衰退を論じるプライスの議論に対して、人口増加傾向を示すことに力を置いていた。しかしハウレットは、1788年の『わが国の貧民の増大と救貧税の増加の原因として普通説明される議論の不十分さ』以降、救貧問題もしくは

貧困の原因論にその関心を移していく。そこではタウンゼンドの『救貧法論』(1786年)などを批判対象に据え、貧困の原因は、生活資料の価格上昇に比べて労働の価格が上昇せず、そのため総人口に対する貧民の比率や貧民を扶養するための支出が増大してしまったことにあると論じた(深貝, 2009, 補論)。さらに1795年にイングランドは深刻な食糧飢饉を経験したのだが、その時点でハウレットはピットの議会演説を批判的に検討し、救貧法が本来は持つはずのメリットを示すパンフレットを刊行したほどである(深貝, 2005)。

イングランド南部バークシャーの教区牧師(rector)であったデイヴィッド・デイビス(David Davies, 1742-1819)は1787年に教区の6家族の家計を調査し、近隣の地域の既存のデータも活用しながら下層の人々の生活水準を割り出す作業を行なった。その著書『農業労働者の境遇』は、その序文が1795年3月16日付であって、1795年夏以降の食糧飢饉の深刻化に先立って行なわれた考察ではある。しかし却ってこの書物

は、一時的な要因に留まらず、ある種の文化的な状況変化という要因をも射程に入れて、下層の人びとの「苦境」の原因を探究したものとなっている。デイヴィスは家計調査を通じて下層の日常的生活資料を確認し、さらに14世紀以来の必需品の中身の変化をも確かめるという手続きをとった(Davies, 1795, pp.5-19, pp.68-70)。この方式によりたとえば、他国ではそうでないのにイングランドでは下層の人々が小麦のパンを食べるのは贅沢だ、という批判に対して、耕作の進展と改良の結果、もはや日常的なものになっていると論じた。これは、奢侈が下層にも広まったから却って苦境に陥るとの議論に対する反論であった(pp.31f.)。

1795年の飢餓の深刻化は、議会でも論争を呼び起こすこととなった。賃金の最低水準に対して立法行為は立ち入るべきかいなか、という事柄なのであるが、政治の中枢にあったウィリアム・ピットと、それに対して醸造業を営み下院議員であったサミュエル・ウィットブレッドとが熾烈な議論を展開した(深貝, 2005)。これはある意味では、14世紀以来の賃金の水準と治安判事の役割、および団結のあり方をめぐる問題圏にも関わるもので、のちの19世紀終盤以降の論争にも潜在的には連なるものとなる。

1795年の飢餓状況は、また、その実態を把握するための統計への関心を促し、長いタイム・スパンにわたる人口増減の動態ではなく、下層の人びとの生活境遇を把握するために実態を調査することが役立つという認識を生み出した。そこでまず、下層が困窮しているとはどういうことなのか、という意味で、「貧困」と「窮乏」もしくは「困窮」とのあいだの違いをめぐり理解が問われることとなった。また、実態を把握するといった場合、境遇を細分化して原因を対応させて考えるという思考を促した。貧困もしくは救貧法について歴史的な回顧展望を行なうというルートを通じて検討するスタイルもあった。これらの複合のもとで、統計を調査し、あるいは政策的な立法のあり方を考え、そして救貧対策のための処方箋を描くという試みが、

1795年を経てさまざまに展開することとなった。

貧困についての実態調査を、のちの家計調査のようなスタイルで着手したのがデイヴィッド・デイヴィスであるが(Davies, 1795)、この手法はフレデリック・イーデンの『貧困の状態』(Eden, 1797)にも取り入れられた。<sup>11)</sup> ベンサムもまた、調査のために、単に家計の指標項目などではなく、むしろ原因と実態とを勘案してジャンル分けするような調査を構想したのであるが、いわば項目倒れで、調査そのものの実施に進むことはなかった。

救貧をめぐる立法の歴史的なレビューを行なったトマス・ラグルズ(Ruggles, 1793-1794)と並んで、首都ロンドンにおける貧民の困窮に対して、スープなど炊き出しを行ないつつ、犯罪を防ぐのかと論じたパトリック・コフーンの議論をも、ベンサムは参考にしていて、困窮と犯罪とを、困窮対策と犯罪予防として論じるその設定(Colquhoun, 1799など)は、立法と犯罪予防との関わりに関心をよせ続けたベンサムの議論と、必ずしも無縁ではない。

いまひとつのスタイルは、政治体制もしくは所有制度の地平で貧困を問うというものであって、そのなかの両極の典型が、ウィリアム・ゴドウインの『政治的正義』(1793年)とトマス・ロバート・マルサスの『人口論』(1798年)であるが、この両者については、いまここで説明を施す必要もないであろう。両者それぞれに、なにがしかの歴史的スパンを持ち、自然的な人間の姿とは何かという問いを漂わせながらの考察であるが、それとともに、フランス革命の衝撃、そしてアイルランドにおけるユナイテッド・アイリッシュマンに突出するような急進化のなか

11) デイヴィスの議論については、吉尾(2008)がスピーナムランドとの関わりで検討を行なっている。残念ながら執筆者の1990年前後の仕事に、そしてご本人に接する機会がなく、その追悼のために編まれた書物によって当該の検討を知った次第である。

での議論でもあった。

### 3 スターク版『ジェレミー・ベンサム経済学著作集』以降のベンサム経済論

(1) ベンサム経済論をめぐる緩やかな波状的展開  
J.M. ケインズの示唆のもと、ウェルナー・スタークが編纂した『ジェレミー・ベンサム経済学著作集』が3巻本で刊行されたのが1952年から1954年にかけてであった。スターク版は19世紀半ばのパウリング版に比して、新資料開拓とともにManual of Political EconomyとInstitute of Political Economyとを別の著作として区別して提供したことなど、資料的な意義を持っていた。その後1950年代から1960年代にかけて、このスターク版によってベンサムの経済論が検討された。国内でいえば、石本美代子(1955; 1956)、山下博(1959-1960)などが早くも本格的な検討を行なったが、その後、小林(1965)などで文献紹介的には触れられ、石垣(1979)において踏まえられつつも、固有にベンサムの経済論を、スターク版を活かして検討するという試みは低調となった。

永井義雄『ベンサム』(1982)が「高利擁護論」を部分的に訳し、その後、日本のベンサム研究者の何人かがロンドンのベンサム・プロジェクトとコンタクトを取り始めるころから、ベンサムの経済論への新たな関心が育まれるようになってきた。当座は、徐々に刊行されるようになった『ジェレミー・ベンサム著作集』、『書簡集』のいくつかを参看しつつも、経済学領域についてはスターク版がほとんど唯一のチャンネルであった。そのなかで、音無(1993)、有江(1993)、音無(2004; 2007)など、ベンサムの著作の資料的なベースを問い、あるいは新たな検討を加える試みが進められた。

この新たな流れは、英語圏、とくにロンドンのベンサム・プロジェクトとトロントで『J.S. ミル著作集』(33 vols., 1963-1993)を刊行してきたプロジェクトとの共同による研究スタイルの登場により加速された。雑誌Utilitasの刊行はこれら2つのプロジェクトそれぞれのNewsletter

からの発展的な融合からスタートしたし、近年はほぼ隔年で大会が開催される国際功利主義学会(ISUS)もこの賜物である。また、ベンサムの新たな『著作集』を活かした研究の登場により、この20年ばかり、ベンサム解釈のレヴィジョニズムとでもいうべき様相を生み出している。<sup>12)</sup>

ベンサムの経済論そのものをめぐっては、国際的な研究の流れとして見た場合、Himes(1936)やZagday(1948)に替わってBahmueller(1981)が救貧論への見通しを与えた。Stark(1941)に替わってKelly(1989)が、期待と安全を軸とするベンサム論の新たな解釈を示している。Michael Quinn(1994; 1997; 2008)やNatalie Sigot(1996; 2001)がそれぞれ救貧問題、および賃金構造論などに焦点を当てて検討を進めた。またMarco Guidi(1990; 2010)が経済的自由主義との関係で、Takuo Dome(2004, Ch.4)が財政論として、それぞれ系譜上の位置づけを与えている。ほかに、Waldron(1996)や、匿名の人口問題論([Anonymous], 1995)もある。

【補1】ベンサムの経済学関連著作、著述をめぐる資料的なベースの段階的展開、および、ベンサム・マニユスクリプトBox 17へのアクセス顛末

ベンサムの経済論も含めての検討が再びなされつつあるとはいえ、永井(2014)がその冒頭で述べているように、スターク版『ジェレミー・ベンサム経済学著作集』に過度に頼るのは危うい。その第1巻巻頭のベンサムの方法的な思考のダイジェストは、まちまちなテキストから採られた寄せ集めで、文脈を抜きに解釈を進めるとベンサムを歪めることともなる。

そのなかで、私は1997年ごろからこの論文に連なるベンサムの富裕と人口をめぐるテーマ

12) 功利主義研究をめぐる特徴的な変化や、とくにベンサム研究をめぐる国際的な状況の一端は、先般、『ジェレミー・ベンサムの挑戦』(深貝、戒能編, 2015)の総論Ⅱ「広まり変転する〈ベンサム〉から蘇るベンサム像へ」(深貝・執筆)に示した。

に、そしてやがてはこれに救貧や文明観を関わらせる形で、検討に取り掛かった。スターク版はむろん頼りになり、そして新旧の『著作集』や現行の『書簡集』をも活用しようとしたのだが、実のところはこれだけでは不足していることに気が付いた。それというのも、18世紀を通じての当該主題の思想の展開のなかでベンサムを位置づけることとともに（深貝，2001）、当のベンサムの思考が展開していく様相を探ろうとしたのだが、後者の作業のためには草稿群を相応しく活かすことをせざるを得ないからである。まずは、1780年代終盤からのイングランドを取りまく政治的経済的国際的な状況は大きく揺らいでおり、そのなかで、折々に焦点となるテーマのなかでベンサムは思考を練っていた。つぎにベンサムは、思考を練るに当たって、しばしば大胆にテーマ、もしくは関心を移し、そして多くを書き進めるタイプの人物である。さらに、とりわけベンサムの書き進める主題群のうち、経済に関するテーマは著作として完成にたどり着いたものはほとんどなく、バウリング版はいうに及ばずスターク版も、草稿群のなかから編纂を施したものである。むろん相対的には19世紀半ばのバウリング版よりも20世紀半ばのスターク版のほうが大幅に改善されているとはいえ、移ろいゆく環境のもとでどのようにベンサムが思考を進めていったのか、あるいは関心を切り替えていったのかを探るうえで、スターク版では盛り込まれない素材群への配慮が不可欠に思われた。

幸いにしてロンドンのUCLに行けば、とくにベンサム・プロジェクトの配慮によって、貴重書室に所蔵されるベンサムのマニュスクリプトそのものを閲覧する便宜は図ってもらえた。そしてまた、UCLのもとにあるマニュスクリプトのマикроフィルム一式を、その複製を作ってもらって日本に取り寄せるという工夫も、永井義雄教授（当時、関東学院大学）を研究代表者とする科学研究費によって進められた。中央大学では土方直史教授、音無通宏教授を中心とする尽力により既にジェレミー・ベンサムの原典が

多く所蔵されていたので、やがてこのベンサム・マニュスクリプトのマикроフィルムは中央大学図書館に収蔵された。しかしベンサム本人の手書きは独特の筆筆で、現物ないしはマクロフィルム画像に接したところで到底、自力で判読、活用などはできそうになかった。こういうわけで、小論に示すテーマについてはその基礎作業を行なおうとするものの、いくつかの資料的な制約、というよりもひとまずのアクセス可能でありながら使いこなすには至らなかったという意味での資料活用上の制約があって、ある種のペンディング状態にあった。その折に採った打開策は、これはフレッド・ローゼンからヒントをもらってのことなのだが、ファンドを用意して解読を進めてもらう、という手立てであった。そこでUCLのベンサム・プロジェクトにおいてその中心を担うひとり、フィリップ・スコフィールドと相談をして、ベンサム・プロジェクトでの解読作業メンバーのオリバー・ハリス（Oliver Harris）に、マニュスクリプトのBox 17の解読作業を引き受けてもらった。<sup>13)</sup> そういうわけで一次的な解読は成し遂げられたのだが、今度は新たな問題として、多くは日付の（執筆年次の）記載のない素材を、どのような配置で既存の解読テキストと組み合わせるべきか、という問題が残ってしまった。<sup>14)</sup>

しかし近年、資料的な状況には新たな変化が生じている。概略的にいえば、1960年代から

13) 作業のための費用として科学研究費・基盤研究C「古典派経済学における富裕と人口」（2000 - 2002年度、研究代表者、深貝保則）を活用し、当時勤務していた東京都立大学の口座からUCLの口座を介しての送金を行なった。これによりオリバー・ハリスによる解読が進められ、2000年のうちには電子ファイルにより届けられた。

14) Box 17に限っても353枚に及ぶマニュスクリプトには日付のないものが多く、スターク版『経済学著作集』第3巻末尾に付せられたマニュスクリプト出典の典拠などを手掛かりとしても、新たに解読された資料をどの時点のものとして当てはめて活用すべきなのか、思いあぐねる仕儀となった。

刊行され始めた新たな『ベンサム著作集』、『ベンサム書簡集』に加えて、マニュスクリプトの解読を進めるプロジェクトが最近の情報ネットワーク環境を活用して進展しつつあることが、資料的な条件を大幅に改善している。いまやベンサム・プロジェクトのもとで進められている Transcribe Bentham の試みは、デジタル・ヒューマニティーズの展開のなかでもヴォランティア参加型にして質的に維持を図っている成功例として、いわば一種の花形なのである (Moyle, 2011; Causer, et al. 2012)。

とくに経済学関係についていえば、何度かの企画立案が不首尾に終わったのちにこのたび、ベンサム・プロジェクトによる当該企画向け予算獲得に支えられてマイケル・クインの編集によって『経済学著作』の刊行が開始されたことが、とりわけ貴重である。これについては次項にいま少しの経緯を記載するが、ともあれ、この新たな『経済学著作』第1巻の登場を受けて、小論はこのたび、ベンサムの当該のテーマについての検討を図るものである。

## (2) スターク版『ジェレミー・ベンサム経済学著作集』から新『著作集』版『経済学著作』第1巻の登場へ

ベンサム生存中に少なからずの草稿を整理してフランス語版として刊行したエティエンヌ・デュモンの手になる成果、ベンサム没後にその草稿を託されたジョン・パウリングを中心とした編纂による19世紀半ばの『著作集』などに加えて、20世紀半ば以降におけるベンサムをめぐる文献事情の展開以来のなかで、経済学関係のベンサム著作の資料的状况を見ておこう。

パウリングを中心とした編纂ののち久しくユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの図書館に所蔵されるに任されていたベンサムのマニュスクリプト群は1930年代にひとまず内容が確認され、テイラー・ミルンによってカタログが提供された (Milne, 1932)。併せそのマニュスクリプトのうち経済学関係についてはジョン・メイナード・ケインズの発案もありウェルナー・スター

クによる編纂作業が進められ、1950年代前半に『経済学著作集』3巻本として刊行された。ベンサム研究のなかで経済に関わる領域が検討されることは少ないのだが、ごく最近に至るまでの検討はおおむね、このスタークによる編纂の恩恵に与ってきた。しかし21世紀に入ってから、小論の主題にとってのベンサムの文献上の事情は新たな展開を見せている。

パウリング版『著作集』に替わるべき1960年代からの新たな『ジェレミー・ベンサム著作集』の一環として、マイケル・クインによる編纂で『救貧法』(*Writings on the Poor Laws*)の2巻本が2001年および2010年に刊行された。これに対して、経済学関係はなかなか難航した。スターク版に替わるべき『経済学著作』の編纂の可能性については、1990年前後にポール・ケリーが調査検討を行なった (Kelly, n.d.)。その後、とくに東京で第4回国際功利主義学会が開催され (1994年)、それに続いて共同研究の試みが展開するなかで、Economic Writings を日本側の協力で展開する可能性も模索されたのだが、なかなか難しい課題だった。

2010年前後から、ロンドンのベンサム・プロジェクトが Transcribe Bentham の工夫という新機軸を打ち出すなかで、『救貧法』の2巻本を編纂した Michael Quinn が今度は『経済学著作』に取り組む環境を整えた。そのおかげで、おおむね4巻本として予定される『経済学著作』のうちの第1巻が2016年夏に刊行され、従前には利用が難しかったいくつかの資料の検討が可能となった。『救貧法』の第2巻はベンサム生存中に刊行された書籍について新たに版を組み直して収録したものであるのに対して、『救貧法』の第1巻はマニュスクリプトにアクセスするしか閲読できなかったものを収録していて有益である。また、新著作集版『経済学著作』(*Writing on Political Economy*, 2016) 第1巻は1780年代なかばにベンサム自身がフランス語で執筆した草稿のうち経済の領域に関わる構成プラン部分を収録しており、このお蔭で、従来はまったく看過されていた素材にアクセスするこ

表 1 Manual of Political Economy

Michael Quinn (ed.), Collected Works - Writings on Political Economy, Vol.1, 2016		
MSS	page	Chapter, Section
基本的な plan は XVII, 65		BOOK I. GENERAL MATTER
	167	§1. Introduction
	170	§2. Fundamental principles
	176	§3. Modes of operating in the power of government in the pursuit of the ends of political economy
	178	§4. Regard due to subsisting interests-or Dangers to be guarded against in a change
	178	§5. Ways in which national wealth is capable of receiving an encrease: or, Possible Modes of Encrease
cf. XVII, 60, 64	178	§6. Of Patents or exclusive privileges for inventions, and the expediency of granting them
	184	§7. Limits of the subject of Political Economy with: Distributive Law; Penal Law; Military department; Police
基本的な plan は XVII, 65		BOOK II. ENCOURAGEMENT-INTELEGIBLE MODES
	185	§1. Loans of Capital
	190	§2. Gift of Capital
	191	§3. Of Bounties on production
	196	§4. Bounties on exportation
	200	§5. Drawbacks on exportation
	201	§6. Exemptions from taxes and other burthens on production
	202	§7. Exemption from, or Forbearance of, taxes on export
	203	§8. Prohibition of exportation of the article meant to be favoured in the instance of Gold and Silver
	203	§9. Taxes on exportation of the article meant to be favoured
	203	§10. Bounties on Import of the article in respect of which wealth is meant to be encreased
	203	§11. Exemption from, or forbearance of, taxes on import
	203	§12. Bounties on production of raw materials
	203	§13. Bounties on import of raw materials
	203	§14. Exemption from taxes on production of raw materials
	203	§15. Exemption from taxes on importation of raw materials
	203	§16. Prohibition of export of raw materials
	203	§17. Taxation of export of raw materials
	204	§18. Prohibition of rival branches of industry: i.e: of the production of rival manufactures
	205	§19. Prohibition of rival imports
	206	§20. Prohibition of rival exports
	206	§21. Taxation of rival branches of home manufacture
	207	§22. Taxation of rival imports
	207	§23. Taxation (for discouragement's sake) of rival exportations
	207	§24. Non-importation agreements
	207	§25. Bounties on production of the instruments of manufacture
	207	§26. Exemption from taxes on the production of instruments of manufacture
	208	§ 27. Prohibition of the exportation of materials or instruments of manufacture
	208	§28. Taxation on the exportation of materials or instruments of manufacture
	208	§29. Prohibition of the emigration of hands
	210	§30. Taxation on the emigration of hands
	210	§31. Premiums for the importation of foreign arts and hands
	211	§32. Prohibition on the production of hands-Cottage Act
	211	§ 33. Prohibition of the migration of hands from employment to employment-Settlement-laws; Apprenticeship Laws
	211	§34. Expulsion of hands-Intolerant Laws; Hawkers Act
	212	§35. Treaties protecting against discouragements applied to our exports
	212	§36. Treaties protecting against discouragements applied to our imports
	212	§37. Treaties obtaining from a foreign nation encouragements in favour of our own exports to that nation



## 新著作集版（左）とスターク版（右との対照）

W.Stark (ed.), Economic Writings, Vol.1, 1952		
Chapter, Section	page	MSS
[PART ONE: GENERAL OBSERVATIONS]		
1. Introduction	223	XVII, 14, 15
2. Fundamental principles	226	XVII, 24, 22, 25, 26, 27, 28
3. Modes of operating in the power of government in the pursuit of the ends of political economy	231	XVII, 220
[4. Of the limit set to the operation of government by the dependence of trade on capital]	233	XVII, 22, 60, 59, 23, 59, 61, 20
[5. Of the] regard due to subsisting interests, or dangers to be guarded against in a change	236	XVII, 22, 72
[PART TWO: OBSERVATIONS OF GOVERNMENT WITH A VIEW TO POLITICAL ECONOMY]		
[Ia. Improper Measures : Direct encouragements]		
[6.] Loans of capital	238	XVII, 29, 30
[7. Gifts of Money and in kind; gratuitous loans]	241	XVII, 32
[8.] Of bounties on production	242	XVII, 33, 71, 17, 34, 35, 38, 39, 36, 37
[9.] Bounties on exportation	248	XVII, 42, 44, 43, 71, 18
[10.] Exemptions from taxes and other burthens on production	252	XVII, 40
[11.] Drawbacks on exportation	254	XVII, 278
[12.] Premiums for the immigration of foreign workmen [and for the] importation of foreign arts	254	XVII, 280
[Ib. Improper Measures : Indirect Encouragements]		
[13.] Prohibition of rival branches of industry, i.e. of the production of rival manufactures	255	XVII, 45
[14.] Prohibition of rival imports	256	XVII, 275
[15.] Taxation of rival branches of home manufacture	257	XVII, 276
[16.] Taxation of rival imports	257	XVII, 277
[17.] Non-importation agreements	258	XVII, 279
[18.] Treaties obtaining from a foreign nation encouragements in favour of our own exports to that nation	258	XVII, 41
[II. Proper Measures]		
[19.] Of patents or exclusive privileges for inventions and the expediency of granting them	260	XVII, 46, 47, 48, 49
[20.] What [is] to be done in respect of security in point of subsistence	265	XVII, 66, 73

とができるようになった。さらに『経済学著作集』第1巻には1790年代半ばのベンサムの草稿「経済学の便覧」(Manual of Political Economy)が新たな編纂により収められている。ちなみに当該巻は、かつてその解説をオリバー・ハリスに託したマニュスクリプト Box17 を活用したものである。

### (3) 「経済学便覧」：スターク版と新『著作集』版

『経済学著作』第1巻には1790年代半ばのベンサムの草稿「経済学便覧」(Manual of Political Economy)が新たな編纂により収められている。もともと「経済学便覧」は1840年代にジョン・パウリングを中心として編纂刊行された『ジェレミー・ベンサム著作集』に収められたことによって存在が知られるようになったのだが、その編纂には問題があると指摘したのがウェルナー・スタークである。パウリング版では、1790年代と1800年代との2つの時期の互いに異なる草稿が、その時期の違いに無頓着に Manual of Political Economy のタイトルのもとに混然と収録されているというのである。そこでスタークは、当該の草稿群を整理しなおして、Manual of Political Economy と Institute of Political Economy とに分けて提示した。それぞれスターク版『経済学著作集』の第1巻と第3巻とに収録されたものである。このたび、マイケル・クインは Manual of Political Economy を新著作集版『経済学著作』第1巻に収録するに際して、新たにマニュスクリプトに遡って組み立てなおしを行なった。表1は、マイケル・クイン編集の当該巻の textual introduction をも踏まえて、スターク編『経済学著作集』第1巻(1952)所収のもの(右側)とクイン編『経済学著作』第1巻(2016)のもの(左側)との概略的な対

比を示すものである。<sup>15)</sup> 節の見出しとしても、相当の組みかえがあるので、第5節でこの点を踏まえて検討する。

### 【文献一覧】

[Bentham, Jeremy]

Jeremy Bentham の著作集を、以下のように略号で示す。

COR: 『ジェレミー・ベンサム書簡集』

*The Correspondence of Jeremy Bentham*, ed. T. L. S. Sprigge, I. R. Christie, A. Taylor

Milne, J. R. Dinwiddy, S. Conway, C. Fuller, L. O' Sullivan, vols.1-5, London: The Athlone Press; vols. 6-12, Oxford: The Clarendon Press, 1968-2006.

CW: (新) 『ジェレミー・ベンサム著作集』

*The Collected Works of Jeremy Bentham*, ed. J. H. Burns (1961-79), J. R. Dinwiddy (1977-83), F. Rosen (1983-94), F. Rosen and P. Schofield (1995-2003), P. Schofield (2003-), London: The Athlone Press & Oxford: The Clarendon Press.

EW: スターク版『ジェレミー・ベンサム経済学著作集』

*Jeremy Bentham's Economic Writings: Critical Edition based on his Printed Works and Unprinted Manuscripts*, 3 vols., ed. W. Stark, London: George Allen & Unwin, 1952-54.

WPE-1: 新『著作集』版『経済学著作』第1巻 *Writings on Political Economy*, vol.1, ed. Michael Quinn, (*The Collected Works of Jeremy Bentham*), Oxford: Clarendon Press, 2016.

COR および CW の既刊分リストおよび進行中の情報は Bentham Project, University College London の下記 URL にまとめて掲載されている。

[https://www.ucl.ac.uk/Bentham-Project/publications/collected\\_works](https://www.ucl.ac.uk/Bentham-Project/publications/collected_works)

[https://www.ucl.ac.uk/Bentham-Project/publications/works\\_in\\_progress](https://www.ucl.ac.uk/Bentham-Project/publications/works_in_progress)

15) スターク版と『新著作集』クイン版とのあいだの Manual of Political Economy の編纂状況を対比して表として示す作業について、19世紀イギリス経済史を専攻する松坂雅子さん(東京大学大学院経済学研究科院生)に担っていただいた。

[Transcribe Bentham の URL]

[http://www.ucl.ac.uk/Bentham-Project/transcribe\\_bentham](http://www.ucl.ac.uk/Bentham-Project/transcribe_bentham)

[http://www.transcribe-bentham.da.ulcc.ac.uk/td/Transcribe\\_Bentham](http://www.transcribe-bentham.da.ulcc.ac.uk/td/Transcribe_Bentham)

(いずれも 2016 年 1 月 20 日、アクセス)

[Primary sources] <sup>16)</sup>

Colquhoun, Patrick (1799), *The state of indigence, and the situation of the casual poor in the metropolis, explained; with reasons assigned why the prevailing system, with respect to this unfortunat class of the community, contributes, in a considerable degree, to the*

16) 今後の検討の手掛かりとして、いささか詳細な文献情報を記載する。オリジナル資料については、とくに稀少なものの入手、および電子的な検索の利用の便宜の(その可能性の)ために、ECCO, MOMW への収録情報を付す。ECCO, MOMW は古典的書籍のデジタル画像データ・ベースで、JUSTICE のコンソーシアム方式によって導入している大学図書館も相当数ある。ものによってはほかに、フリー・アクセスの google books, Internet Archive そのほかの画像データにアクセスすることが可能なものもある。また、かつての Augustus M. Kelley ばかりでなく、近年では廉価版のリプリントも増えてきた(必ずしも印刷状態は良くないものも多いが……)。むろん、国内の諸図書館のなかには優れたオリジナル版のコレクションを蔵している機関も少なくなく、その所蔵情報の多くは国立情報学研究所の提供する横断的な学術コンテンツサービスの CiNii Books によって得ることができる。

ついでながら、目下 2020 年を目安に、この諸研究機関横断的な学術所蔵情報の提供の仕組みの組みなおしが図られつつある。ネットワーク化のもとでの知のコミュニケーションのもとで、図書館の機能や学術情報のあり方も変わりつつあるというなかでの古典資料の調査・研究のあり方をめぐっては、digital humanities の可能性、そしてさらにはそれがアナログ的な人文知との間で相補的に生み出さる可能性(およびその陥穽)をも含めての検討が必要となろう。この点については 2014 年の国際功利主義学会 (ISUS) 大会の折に、Transcribe Bentham に因んで 2 つのラウンドテーブルを企画した。関連して、深貝 (2014)。

*increase and multiplication of crimes: with suggestions, shewing the necessity and utility of an establishment of pauper police, immediately applicable to the casual poor, under the management of responsible commissioners, with their functions explained ...* London. [digital: ECCO, MOMW]

Davies, David (1795), *The Case of the Labourers in Husbandry Stated and Considered, in three parts ... with an appendix; containing a collection of accounts, shewing the earnings and expences of labouring families, in different parts of the kingdom*, London. digital: ECCO, MOMW]

Eden, Frederick Morton (1797), *The State of the Poor, or, An history of the labouring classes in England, from the conquest to the present period*, 3 vols., London. [digital: ECCO, MOMW]

Eden, Frederick Morton (1800), *An Estimate of the Number of Inhabitants in Great Britain and Ireland*, London. [digital: ECCO, MOMW]

Ferguson, Adam (1767), *An essay on the history of civil society*, Edinburgh. [digital: MOMW]

[Great Britain] (1744), *An Act for raising and establishing a fund for a provision for the widows and children of the ministers of the Church of Scotland, and of the heads, principals, and masters, of the Universities of Saint Andrew's, Glasgow, and Edinburgh*, [London : printed by Thomas Baskett and Robert Baskett, 1743 [i.e. 1744]] . [digital: ECCO]

Howlett, John (1781), *An Examination of Dr Price's Essay on the Population of England and Wales*, Kent. [digital: ECCO, MOMW]

Hume, David (1752), *Political Discourses*, Edinburgh.

Kames, (Lord) = Henry Home (1747), *Essays upon Several Subjects concerning British Antiquities*, Edinburgh. [digital: ECCO]

Kames, (Lord), (1758), *Historical Law-Tracts*,

- Edinburgh. [digital: ECCO]
- Kames, (Lord) (1774), *Sketches of the History of Man*, 2 vols., Edinburgh. [digital: ECCO, MOMW]
- M' Farlan John (1778), *On the perpetuity of the Gospel-dispensation. A sermon, preached before the Society in Scotland for propagating Christian knowledge, at their anniversary meeting, in the High Church of Edinburgh, on Friday, June 5 1778*, Edinburgh. [ECCO]
- M' Farlan, John (1782), *Inquiries concerning the Poor*, Edinburgh. [digital: ECCO, MOMW]
- Price, Richard (1769), *Observations on the Expectations of Lives, and the Increase of Mankind, the Influence of Great Towns on Population, and Particularly the State of London, , with respect to healthfulness and number of inhabitants : communicated to the Royal Society, April 27, 1769*, London. [digital: ECCO, MOMW]
- Price, Richard (1771), *Observations on Reversionary Payments; on Schemes for providing annuities for widows, and for persons in old age; on the method of calculating the values of assurances on lives; ...*, London. [digital: ECCO]
- Price, Richard (1779), *Essay Containing an Account of the Progress from the Revolution, and the Present State, of Population in England and Wales* , published in William Morgan, *The Doctrine of Annuities and Assurances on Lives and Survivorships, stated and explained* , London, 1779 [digital: MOMW]
- Ruggles, Thomas (1793-1794), *The History of the Poor; their rights, duties, and the laws respecting them, in a series of letters*, 2 vols., London. [digital: ECCO, MOMW]
- Smith, Adam (1776), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 2 vols., London. [digital: ECCO, MOMW]
- Steuart, James (1767), *An Inquiry into the Principles of Political Œconomy: Being an Essay on the Science of Domestic Policy in free nations. In which are particularly considered population, agriculture, trade, industry, money, coin, interest, circulation, banks, exchange, public credit, and taxes*, 2 vols., London. [digital: MOMW]
- Townsend, Joseph (1786), *A dissertation on the poor laws* [By a well-wisher to mankind] , London. [digital: ECCO, MOMW]
- Wallace, Robert (1753), *A Dissertation on the Numbers of Mankind in Antient and Modern Times: in which the Superior Populousness of Antiquity is Maintained. With an Appendix, Containing Additional Observations on the Same Subject, and Some Remarks on Mr. Hume's Political Discourse, Of the Populousness of Antient Nations*, Edinburgh. [digital: ECCO, MOMW]
- [Webster, Alexander] (1748), *Calculations, with the principles and data on which they are instituted: relative to a late act of Parliament, intituled, An act for raising and establishing a fund for a provision for the widows and children of the ministers of the church, and of the heads, principals, and masters of the universities of Scotland. Shewing the rise and progress of the fund. Published by order of the trustees nominated in the said act of Parliament*, Edinburgh. [digital: ECCO & MOMW]
- Young, Arthur (1774), *Political Arithmetic, containing Observations on the Present State of Great Britain*, London. [ditigal: ECCO, MOMW]
- [Secondary sources]
- [Anonymous] (1995), Bentham on Population and Government, *Population and Development Review*, 21 (2), pp.399-404.
- Amoh, Yasuo (2005), Robert Wallace: First Draft of

- A Dissertation on the Numbers of Mankind in Ancient and Modern Times, *Kochi University Review* (『高知論叢』), no.82, March.
- Bahmueller, Charles F. (1981), *The National Charity Company: Jeremy Bentham's Silent Revolution*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Causser, Tim, Tonra, Justin, & Wallace, Valerie (2012), Transcription maximized; expense minimized: crowdsourcing and editing *The Collected Works of Jeremy Bentham, Literary and Linguistic Computing*, vol. 27, no. 2, pp.119-137.
- Dome, Takuo (2004), *The Political Economy of Public Finance in Britain 1767-1873*, Routledge.
- Fukagai, Yasunori (2001), Joseph Townsend and Jeremy Bentham on Wealth, Population and Pauperism, presented at the History of Economic Thought Conference, September 5 – 7, 2001 at Manchester Metropolitan University.
- Fukagai, Yasunori (2005), Scottish Approaches to Wealth and Population in 1770s and 1780s: Lord Kames, Adam Smith and John M'Farlan, presented at the Conference of the European Society for History of Economic Thought, June 9-12, 2005 at University of Stirling.
- Fukagai, Yasunori (2013), Comment on Professor Yves Charbit's 'Population, Economic Growth and Religion,' on the occasion of the Conference on Population, Poverty and Welfare in the History of Economic Thought: an international comparison, March 18-19, 2013 at Waseda University.
- Himes, N.E. (1936), Jeremy Bentham and the Genesis of English Neo-Malthusianism, *Economic History*, 3 (11), February, pp.267-276.
- Guidi, Marco E. L. (1990), 'Shall the blind lead those who can see?' Bentham's theory of political economy, in D. E. Moggridge (ed.), *Perspectives on the History of Economic Thought, volume III*, Classics, Marxians and Neo-Classicals, published for the History of Economics Society by Edward Elgar, pp.10-28.
- Guidi, Marco E. L. (2010), Le Manuel d'économie politique de Jeremy Bentham au prisme de la traduction d'Etienne Dumont et des relectures de James Mill et de John Stuart Mill, *Revue d'études Benthamiennes*, 7. (web version : <https://etudes-benthamiennes.revues.org/205>)
- Kelly, P.J. (n. d.), A Report Prepared for the Bentham Committee of the University of London and the Committee for Law and Economics of the University of Chicago Law School, on the Status of Bentham's Economic Writings, with a View to their Publication as Part of the New Collected Works of Jeremy Bentham, 27p.
- Kelly, P.J. (1989), Utilitarianism and Distributive Justice: The Civil Law and the Foundations of Bentham's economic Thought, *Utilitas*, May, pp.62-81. 有江大介, 高島和哉訳「功利主義と配分的正義——民法とベンサム経済思想の基礎——」, 深貝, 戒能編 (2015) 所収.
- Kyd, James Gray (ed.) (1952), Scottish population statistics, including Webster's Analysis of population, 1755, *Publications of the Scottish History Society*, 3rd ser., vol.44, Edinburgh.
- Lieberman, David (1983), The legal needs of a commercial society: the jurisprudence of Lord Kames, in Istvan Hont and Michael Ignatieff (eds.), *Wealth and Virtue: the Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Cambridge University Press.
- Milne, A. Taylor (1962), *Catalogue of the Manuscripts of Jeremy Bentham in the Library of University College London*, 2nd ed., London: The Athlone Press, University of London (first published in 1937) .
- Moyle, Martin (2011), Manuscript Transcription by Crowdsourcing: Transcribe Bentham, *Liber Quarterly*, Vol.20 No.3-4, pp.347-356.

- Pascal, Roy (1938), Property or Society: The Scottish Historical School of the 18th Century, *Modern Quarterly*, vol.1, pp.167-179. 水田洋訳「財産と社会——18世紀スコットランドの歴史学派」, 水田洋『近代思想の展開』, 新評論, 1976年, 所収.
- Poynter, J.R. (1969), *Society and pauperism: English ideas on Poor Relief, 1794-1834*, London, Routledge Kagan Paul.
- Quinn, Michael (1994), Jeremy Bentham on the Relief of Indigence: An Exercise in Applied Philosophy, *Utilitas*, vol.6, pp.81-96.
- Quinn, Michael (1997), The Fallacy of Non-Interference: the Poor Panopticon and Equality of Opportunity, *Journal of Bentham Studies*, vol.1, pp.1-21. (DOI: 10.14324/111.2045-757X.009)
- Quinn, Michael (2008), A Failure to Reconcile the Irreconcilable? Security, Subsistence and Equality in Bentham's Writings on the Civil Code and on the Poor laws, *History of Political Thought*, vol.29, pp.320-43.
- Schofield, Philip (2009), Werner Stark and Jeremy Bentham's Economic Writings, *History of European Ideas*, vol.35, pp.475-494.
- Sigot, Nathalie (1996), Jeremy Bentham on Private and Public Wages and Employment: the Civil Servants, the Poor and the Indigent, in L. Moss (ed.), *Joseph Schumpeter, Historian of Economics*, London: Routledge, pp.196-218.
- Sigot, Nathalie (2001), Bentham and the Classical Canon, in Evelyn L. Forget and Sandra Peart (eds.), *Reflections on the Classical Canon in Economics: Essays in honor of Samuel Hollander*, London: Routledge, pp.43-56
- Stark, W. (1941), Liberty and Equality, or: Jeremy Bentham as an Economist, *Economic Journal*, vol.51, no.201, April, 56-79
- Waldron, Jeremy (1997), Supply without Burthen Revisited, *Iowa Law Review*, vol.82, pp.1467-1485.
- Zagday, M. I. (1948), Bentham and the Poor Law, in George W. Keeton and Georg Schwarzenberger (eds.), *Jeremy Bentham and the Law: A Symposium*, London, pp. 58-67.
- 有江大介 (1993) 「ベンサムにおける功利と正義——市場社会と経済学の前提——」, 平井俊顕, 深貝保則編『市場社会の検証—スミスからケインズまで—』ミネルヴァ書房, 所収.
- 石垣博美 (1979) 「ウエルスとウエルフェア」, 早坂忠, 伊藤俊太郎, 竹内啓編『「経済学の知性史的考察」(『講座 現代経済思潮』第1巻), 東洋経済新報社, 所収.
- 石本美代子 (1955) 「ベンサム貨幣理論の展開」, 『高崎論叢』第3巻第1号, 68-93 ページ.
- 石本美代子 (1956) 「ベンサム経済理論研究序説」, 『商学論集』(福島大学), 第24巻第4号.
- 音無通宏 (1993) 「いわゆるパウリング版「ベンサム全集」の成立経過と編集者問題」, 『経済学史学会年報』第31号, 14-26 ページ.
- 音無通宏 (2004) 「ベンサムにおける「立法の原理」と初期経済思想の形成」, 『経済学論纂』(中央大学) 第44巻第5-6号, 149-168 ページ.
- 音無通宏 (2007) 「ベンサム功利主義の構造と初期経済思想の展開」, 音無通宏編『功利主義と社会改革の諸思想』(中央大学経済研究所研究叢書43), 中央大学出版部, 99-175 ページ.
- 小林昭 (1965) 「J. ベンサムの経済学二著作について——「政治経済学綱要」「政治経済学原理」——」, 『金沢大学経済論集』第4号.
- 小林昇 (1961) 『経済学の形成時代』, 未来社.
- 小林昇 (1973) 『国富論体系の成立——ダム・スミスとジェームズ・ステュアート——』, 未来社.
- 坂本達哉 (1995) 『ヒュームの文明社会——勤労・知識・自由——』, 創文社.
- 田添京二 (1957) 「ステュアート蓄積論の基本構造」, 内田義彦編『古典経済学研究』上巻, 未来社, 所収.
- 田中敏弘 (1971) 『社会科学者としてのヒューム』, 未来社.
- 田中秀夫 (1987) 「エコノミストとしてのケイムズ

- 卿], 『甲南経済学論集』第27巻第4号, 523-551 ページ.
- 永井義雄 (1962) 『イギリス急進主義の研究——空想的社会主義の成立——』御茶の水書房
- 永井義雄 (1982) 『ベンサム』(人類の知的遺産), 講談社
- 永井義雄 (2003) 「第2版『人口論』のウェブスター, ウォーレス, フランクリン」, 永井義雄, 柳田芳伸, 中澤信彦編『マルサス理論の歴史的形成』昭和堂, 所収.
- 永井義雄 (2014) 「ベンサム経済法学における政治経済学と幸福論——ウィリアム・ペイリとの対比——」, 『経済系』(関東学院大学), 第260号, 145-167 ページ.
- 中野力 (2016) 『人口論とユートピア——マルサスの先駆者ロバート・ウォーレス——』, 昭和堂.
- 羽鳥卓也 (1957) 『市民革命思想の展開——古典経済学成立史序説——』, 御茶の水書房. (増補版, 1976年)
- 深貝保則・戒能通弘編 (2015) 『ジェレミー・ベンサムの挑戦』, ナカニシヤ出版.
- 深貝保則 (2001) 「怠惰な貧民・機会なき貧民・目覚めに誘われる貧民——イギリス経済思想の教育論との接点に向けて——」, 『日英教育研究フォーラム』第5号, 9月, 7-18 ページ. ([http://www.juef.sakura.ne.jp/bulletin/vol.05/juef\\_2001\\_05\\_02\\_fukagai.pdf](http://www.juef.sakura.ne.jp/bulletin/vol.05/juef_2001_05_02_fukagai.pdf) : 2017年1月20日アクセス)
- 深貝保則 (2005) 「最低賃金裁定法案と政治算術1795-96年——ウィットブレッド対ピット論争とハウレット——」, 『経済学史研究』第47巻第2号, 12月, 75-91 ページ
- 深貝保則 (2009) 「人口動態と富裕-貧困認識をめぐる文明史論と政治算術——18世紀スコットランド, イングランド経済思想の側面——」, 『名古屋大学附属図書館研究年報』第8号 (2010年3月刊行), 1-21 ページ.
- 深貝保則 (2013) 「オイコス・ノモス, オイコノミア, エコノミー——概念の生成論的検討・序説——」, 『エコノミア』(横浜経済学会) 第64巻第1号, 5月, 79-94 ページ.
- 深貝保則 (2014) 「デジタル資料の展開と古典研究の可能性に向けて」, 『日本18世紀学会・学会ニュース』, 第77号, 12月, 4-6 ページ.
- 深貝保則 (2015) 「エコノミー, 経済統治, あるいは自然均衡——オイコノミアからの複線的伏流——」, 『N ige ニュクス』創刊号, 堀之内出版, 108-119 ページ.
- 深貝保則 (2016) 「人口論争 (18世紀イングランド, スコットランドにおける人口論争と政治算術)」, マルサス学会編『マルサス人口論事典』昭和堂, 127-134 ページ.
- 森田優三 (1944) 『人口増加の分析』, 日本評論社.
- 柳沢哲哉 (2003) 「ダウンゼンドの救貧法批判」, 永井義雄, 柳田芳伸, 中澤信彦編『マルサス理論の歴史的形成』, 昭和堂, 所収.
- 山下博 (1959), (1960) 「ベンサムの経済理論」(一), (二), 『同志社大学経済学論叢』, 第9巻第3-4号, 46-87 ページ; 第10巻第5号, 12-46 ページ.
- 吉尾清 (2008) 『社会保障の原点を求めて——イギリス救貧法・貧民問題 (18世紀末~19世紀半頃) の研究——』(吉尾清論文集編集・刊行委員会編), 関西学院大学出版会.

(横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授)